

副会長からのメッセージ

「学会=Society としての営み」



早稲田大学 教授
棟近 雅彦

本学会の英文名は、Japanese Society for Quality Control です。この名からもわかるように、学会というのは Society, つまり社会、共同体です。会社組織のように、経営者がいて、給与を払って従業員に仕事をしてもらうような組織とは、大きく性格が異なります。誰かの命令で動くのではなく、会員の積極的な学会活動への関与によって、いい社会が作られていきます。もちろん、我々理事会が明確な方針を定めて引っ張っていくことは不可欠ですが、会員の積極的な参画がなければ機能しません。

日本の社会で少子高齢化が進んでいるように、本学会でも同様の問題に悩んでいます。会員数の減少は、今どこの学会でも頭を痛めているところですが、本学会も例外ではありません。会員動向を分析すると、団塊の世代の方々またはそれより年配の方々の退会者が多いことがわかっています。40代以下の入会者は増えているのですが、ベテランの方が抜けた分を補えていないという状況です。多くの若手にこの分野に興味を持ってもらい、優秀な人材を育てていくことが急務です。

本学会としても準会員制度、研究助成、旅費支援、インカレゼミなど若手に対する支援プログラムをいくつか準備しています。また、鈴木会長のリーダーシップのもと、小学生から高校生までの問題解決型の統計教育体系の構築に向けて活動を行っています。これからも若手育成のための支援プログラムの充実を図っていきたいと考えています。

私は大学に所属し、経営システム工学、特に品

質管理を専門としていますので、この分野の将来のリーダーとなる学界の人材育成が重要な課題です。一方、以前は企業の若手の方が、実務家として品質を語り、品質管理をどのように行っていくべきかを論じる方も多かったのですが、近年はめっきり減ってきたように思われます。団塊の世代の方々の中には、このような方がかなりおられたと思いますが、その方々が退職の時期を迎えています。ぜひ企業の若手の方も、この社会の一員になっていただき、活発な議論に加わっていただきたいと思っています。企業の経営者の方々も、そのような専門家の必要性を認識していただき、若手の実務家がこの社会で研鑽を積む機会を与えていただきたいと思います。

本学会が持続的に成長するためには、多くの人が、極端に言えば日本が品質管理を学理として追究することの必要性を感じる必要があります。品質管理が相当進歩してきたとはいえ、まだまだ未熟な点がたくさんあり、日本の生き残りのためにもますます発展させなければいけない分野です。先に述べた小学生から問題解決の重要性を教えていくという取り組みは、国としてのこの分野の重要性を認識したことの表れだと思います。この分野の発展のためには、産学が切磋琢磨し、相互啓発を行いながら、活力のある社会を作っていくことが大切です。私自身も、魅力ある社会作りに向けて、微力ながらお手伝いしたいと思っています。皆様のご支援、ご鞭撻をお願いいたします。